

◆12月第4週のメッセージ

■日時：2020年12月27日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「主がお入り用なのです。」

■聖書：マルコによる福音書 11：1-14（新約 p83）

■讃美歌：155「山べにむかいて」、532「やすかれ、わが心よ」

お早うございます。

2020年、最後の主日礼拝を迎えました。

昨日発表された新型コロナウイルスの感染者は、全世界で8,000万人を超え、東京も949人で、過去最大となりました。

私たちは今日の礼拝から、オンラインを中心とした礼拝に切り替えています。

この形での礼拝は2月末まで続き、私たちが再び皆集まれるのは、来年の3月7日です。それまで、皆様、どうぞ健康に最大限留意され、この会堂に戻って来ていただきたいと思えます。そして、教会とは、神様への礼拝と、私たちの交わりによって形成されていることを、改めてしっかり心に刻む時として行きたいと思えます。

それでは、今朝与えられた御言葉を見て行きましょう。

イエス様がエルサレムに入城する場面です。

1節から11節までです。

ここでは、3つの内容が展開されています。1つ目は、イエス様がエルサレムに入城する時、2番目は、イエス様に付き従う人々の様子、そして、最後にエルサレム神殿での出来事です。

まず、1節から7節を読みます。

1：一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、

2：言われた。「向うの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。

3：もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。

4：二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。

5：すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。

6：二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。

11章の前に学んだ10章の内容を覚えていらっしゃいますか。

イエス様が、ご自分の死を予告される3度目の場面です。

10章32節をもう一度読みます。

32：一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び12人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。

すでに2度にわたって受難の話しを聞いていた12使徒たちは、イエス様が決然としてそ

の受難の地に赴こうとする姿に驚き、他の弟子たちは恐れます。そして、一行はエルサレムに近づきます。すると、イエス様は突然、向うの村へ行って、子ろばを連れて来るようにと二人の弟子に命じるのです。エルサレム入城の備えをするためでした。

時の支配者であるなら、権力と権威を象徴するためには、馬に乗るのが自然です。しかし、

イエス様が乗ろうとされたのは、人々が日常の生活物資を運ぶのに用いているろばであり、しかもその子どもでした。そこには、人々が期待する新しい王国の支配者としてでは

なく、日々の生活に生きる民衆の一人であること、そして、神様の前にあって汚れなき存在である

ことを示すために、誰も乗ったことのないろばの子に乗って入城しようとされたのです。

ろばが繋がれている向うの村とは、ベタニアと考えるのが自然です。この村には、イエス様との深い交わりが与えられたマルタとマリア、ラザロの兄弟が住んでいましたし、イエス様はこの地を幾度となく訪れていました。ですから、ろばを借りるその方法も知っていました。

二人の弟子は、貸して欲しいと頼んだ後、言葉を続けます。「すぐにここにお返しになります」と。この地を支配していたローマの兵士たちが、断りもなく、勝手に人や動物を自分の用に供していたことから、イエス様にはその心配がないことを知らせる言葉でした。

7 節から 10 節です。

7：2 人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。

8：多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から茎の付いた枝を切って来て道に敷いた。

9：そして、道を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ホサナ。

主の名によって来られる方に、

祝福があるように。

10：我らの父ダビデの来るべき国に、

祝福があるように。

いと高きところにホサナ。

ホサナという言葉は、神様、私たちに救って下さい、という意味です。

人々は、歓呼の声をあげてホサナと叫びました。

人々が望んだのは、ローマの圧政からユダヤ民族を解放する救世主でした。

人々が叫ぶ、ホサナ、私たちに救って下さいには、そのような意味が込められていました。

しかし、ホサナと叫んだ人々の願いと、イエス様に与えられた使命とは、深い断絶がありました。イエス様に与えられた使命は、ユダヤ民族の圧制からの解放ではなく、人間の罪からの解放でした。この断絶は、その後、人々のイエス様への失望と変わり、そして遂に、この叫びは、イエス様を「十字架に付けよ」との叫びに変わります。

人々のホサナと言う叫びを、イエス様はどのような思いで聞かれていたのかと思うのです。

最後に 11 節です。

11：こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、見て回った後、もはや夕方になったので、12 人を連れてベタニアへ出て行かれた。

エルサレム神殿。

神様の都であるエルサレムの象徴です。

又、この神殿は同時に、ユダヤ社会の権威と権力の象徴でした。

祭司長、律法学者は、この権威と権力の上に、彼らの地位を築き上げていました。

祭司長や律法学者たちだけではありません。敵対するファリサイ派の人々の拠り所も又、この神殿に帰せられる権威と権力でした。

そして、イエス様が、神様への真実の礼拝を求めて、妥協なき戦いを挑まれた舞台も又、このエルサレム神殿でした。

エルサレムに入城されたこの日、イエス様は、自分と真っ向からぶつかることになるこの神殿を見て、ベタニアへ戻られます。これから始まる戦いの舞台を見て回られたのです。

以上が、今日与えられた聖書の御言葉です。

私は、今日の説教題に、3節の「主がお入り用なのです」を選びました。

この短い一言に、私たちの信仰生活の全てが集約されていると思うからです。

子ろばの持ち主やそこに居合わせた人々は、大切な子ろばを連れて行こうとする弟子たちに、なぜ連れて行くのかと尋ねた時、「主がお入り用なのです」と告げられます。

受難の地であるエルサレムへの入城の際にイエス様が必要とされたのがろばの子であり、神様はそれを準備されました。

私たちキリスト者の信仰生活は、実はこの出来事と同じです。私たちが日々生きているこの世の現実のただ中で、今、イエス様は生きて働いておられます。

そのイエス様が、その働きに必要なものを求めておられるのです。

そして私たちは、イエス様に聴き従おうとすれば、イエス様が必要とされている物が何かを知ることが出来ます。それを示された時、「主がお入り用なのです」と自分に呼びかけるその言葉を聴いた時、私たちはどうするのが問われています。

コロナ禍の最中（さなか）にいる私たちは、どこにイエス様の働きを見出すのでしょうか？イエス様の後を追うのでしょうか、それとも、ただ黙って、我が身の安全をのみ守り続けて行くのでしょうか。

医療現場で出されている緊急事態宣言には、ぜひとも応えねばなりません。

本当に必要なこと以外で出歩くことは出来ません。

しかし、自分の健康を守りながらも、イエス様の働きを尋ね求めることは出来ます。

イエス様が必要としている物が何かを知ることは出来るのです。

今、この時、イエス様はどこで働いておられるのか、そしてその働きに何を必要とされているのか、それを知ろうとする私たちでありたいと思います。

「主がお入り用なのです。」

キリストに従う歩みとは、日々イエス様の後を追って、主が必要とされている物を見出しに行く歩みです。そして、それを知ったなら、喜びをもって献げる歩みです。それが、神様の御心に従うことであり、地上に神の国を建設する敷石の一つとなります。

最後に、一昨日のクリスマスイブの日の出来事を紹介して、今日のメッセージを終わりたいと思います。その日、教会員のある方からメールが入りました。イブ礼拝のライブはしないのですかととの問い合わせでした。

私は、ライブは考えていませんでした。

教会員及び教会関係者には、3密を防ぐため出席しないようにと連絡しており、外部の方を対象とした礼拝であったので、受付も、献金も、司式も、全て私一人でやらなければなりません。ライブをする準備に気持を奪われてはならないと思っていたからです。

しかし、その晩に私が用意したメッセージは、翌日のクリスマスの日、誰に対してであっても、どのような形であっても良いから、温かな心を贈り物として人に届けることを語っていました。そして、ライブは考えていませんとの私のメールに対し、残念ですが祈っていますとの返信の文面を見た時、ライブをすることを決断しました。ライブこそ、その方への贈り物と思えたからです。

あとで分かったことですが、突然であったにもかかわらず、このライブ礼拝に参加した方は40名を数えていました。

先ほど、主がお入り用なのですとの求めに応じること、それは、神の国をこの地に建設する敷石の一つを置くことだと申し上げました。コロナ禍にあって、この世を闇が覆い尽くそうとするこの時、そうであればこそ、この闇を打ち破る光の業となる神の国建設のために働きたいと願うのです。イエス様が必要とされている物は何かを尋ね求め、それを献げる者になりたいと思います。

祈りましょう。

2020年12月31日（木）

立川教会牧師飯島 信

